

自覺に於ける直觀と反省 (承前)

西田幾多郎

四十

多くの迂路の後、余は終に前節の終に於て、知識以上の或物に到達した。余は是に於て、カント學徒と共に、知識の限定なるものを認めざるを得ない。ベルグソンの純粹持續の如きも、之を持續といふ時、既に相對の世界に墮して居る、繰返すことができなると云ふのは、既に繰返し得る可能性を含んで居る。眞に創造的なる絶對的實在は、*ディオニシユース*やエリギナの考の様に、一切であると共に、一切でないものでなければならぬ。ベルグソンも緊張の裏面に弛緩があると云つて居るが、眞の持續は、エリギナの云つた如く、動靜の合一、即ち止れる運動、動ける止 (*Ipsa est motus et status, motus stabilis et status mobilis*) でなければならぬ。之を絶對の意志といふも、既に中らぬであらう、眞は所謂説似一物即不中である。

現代の哲學に於て、認識以前 *das Vorbegriffliche* の實在とも云ふべきものは、或はヘル

グソンの純粹持續の如く不斷の進行と考へられ、或は未だ形成せられない材料の如きものと考へられ、或はプラトンのイデアの世界の如きものとも考へられて居るが、此等の考方は何も既に相對の世界に墮して居る、知識對象の世界に屬して居る、眞に直接なる知識以前の絶對とは云はれない。余は此點に於て昔のディオニシウスやスコトゥス、エリギナなどの如き中世の神秘哲學の考方が遙に徹底的ではないかと思ふ。神を有となすも中らず、無となすも中らず、神を動といふも中らず、靜といふも中らず、眞に禪家の所謂言ひ得るも三十棒、言ひ得ざるも三十棒である。余はエリギナの創造して創造せられない神 *Natura creans et non creata* は、創造もせず創造もせられない神 *Natura nec creata nec creans* と同一であるといふ考に深き意味を認めざる得ない。或は物自體は斯くの如く思議すべからざるものとすれば、それは全然無用の假定にあらざるやといふ人もあるであらう。併し「甲は甲である」といふ命題を成立せしむるものは主語「甲」の中にあるのでもなければ、客語「甲」の中にあるのでもない、然らばとて此二者を離れてあるのでもない、而も此全體は我々が「甲は甲である」といふことを考へる前に與へられてあるものとせねばならぬ。連續といふことは單に無限に分つことができる」と云ふのではなく、與へられた全體から出立して考へて見ねばならぬ。併

し眞に具體的なる連續は單なる全體ではなくしてその中に分離を含んで居らなければならぬ。此の如き全體は之れを認識對象として限定することはできぬかも知らぬが、我々は之を認識の根柢として認めねばならぬ。分析の上には何等の統一を見出すことができないかも知らぬが、種々なる要素の關係は之に依つて成立つて居るのである。新實在論者は關係に入るものと關係自身とは別物であるといふが、何等かの意味に於て關係に立たざるものは他の關係に對して別物として己を維持することもできない、關係とその要素とは相離すことはできぬ。此等の全體を一といふも中らず、多といも中らず、變するといふも中らず、變せぬといふも中らず、眼は眼を見ることはできず、カメラはカメラ自身を寫すことが出來ぬ様に、之を認識といふカメラのレンズの中に收めることは不可能であらうが、我々は意志自由の形に於て直に之に接することができぬ。カントの所謂汝は斯く爲ざる可からずといふ道德的意識は認識意識よりも一層深い直接な事實である、否、單に深いか直接とかいふばかりでなく、前者は却つて後者を包容すると思ふ。我々の知る世界、否、知るべき世界は廣い、併し之にもまして我々の欲する世界は更に廣い、夢の如き空想も我々の意志對象の世界の領分に屬するのである。知識の世界に於ては虛幻と認められること

も、意志の世界に於ては實在である。「汝は爲さざるべからざるが故に汝は爲し能ふ」といふ語も、是に於ては毫も怪むるに足らない。多くの主知論者からは、意志の自由といふことは單なる錯覺でもあるかの様に考へられて居るが、余は却つて知ると云ふことは意志の一部分であつて、今日の目的論的批評論者の云ふ様に、認識の根柢に意志があると思ふ。意志の世界は知識の世界に比して、無限に廣くして且つその根元となる、意志に依つて、知識の世界、必然の世界が成立つのである。スコトウ・ス・エレギナなどか神に於ては何等の必然も、何等の定命もない、定命 *Prædeterminatio* は神の意志の決定にすぎぬといふのに深い意味があるのである。主知論者が自由意志を空想の如くに考へるのは、意志を對象化して見るが故である、之を自然の世界に投射して見るが爲である。併し苟も之を自然的因果の世界に投射した時には、既に意志といふものではなくなる、何等の意味に於ても、意志の背後に因果を認めるのは、意志を否定するといふことである。常に外的必然のみならず、内的必然即ちスピノサの所謂必然的自由といふことも、意志と結合することはできぬ。

意志は創造的無から來つて創造的無に還り去るとか、神の意志に依つて世界が生ずるとか云ふことは、我々の因果律の考に對して深い矛盾と感ぜられるであらう。

併し無より有を生ずるといふこと程、我々に直接にして疑ふべからざる事實はない、我々に此現實に於て、絶えず無より生じつゝあるのである。之を潜在的なるものが顯現的となると云ふも、單に空名に依つて我々の論理的要求を満足し得るのみであつて、其實何物も説明し得たのではない。斯く無より有を生ずる創造作用の點、絶對的 directly にして何等の思議を入れない所、そこに絶對的自由の意志がある、我々は此處に於て無限の實在に接することができ、即ち神の意志に接續することができるのである。向に現在は無限なる世界の接觸點であると云つて、現在が即ち意志である、無限の世界は意志に依つて結合せられると考へるとができるのである。空虚なる意志から何物も出ないと考へられるのは、意志といふ抽象的概念を實體化して考へる故である。此の如く無内容なる抽象的概念からは、何物も出ないのは云ふまでもない。中世の一般概念論者 *Divinealist* が有を世界の根柢と考へた場合に於ても、若し之を抽象的一般概念と考へるならば、かゝる抽象的概念から何物も出ようはない。併し之に反し若しカントが有名なる *デドクチオン* に於て云つた様に、先驗的自我の統一といふ如きものを考へて見るならば、我々は少くとも此形式に依つて世界が成立するを考へざるを得ない。而して此考を尙一層進めて、超越的意味即ち價値

といふ如きものを考へて見るならば、意味又は價值に依つて世界が成立つといふことが出来る。デカールが神の本體論的證明に於て、我々に完全といふ考のある以上は、完全なるものが存在せねばならぬと云つて居るが、その存在といふ語を自然科学的意味の存在とすれば、かゝる議論は概念と實在とを混同した幼稚なる議論と云ふべきであらう、併し意味の前に存在があるのではない、存在は當爲に基かねばならぬ、我々が完全といふことを考へるからは、絶對的規範意識の存在を許さねばならぬといふは怪むに足らないのである。物理學者の性質とか力とかエネルギーとかいふものも抽象的概念に過ぎない、我々は普通にかゝる概念を實體化して、之に依つて現象の變化が生ずるかの様子に考へて居るが、これは却つて本來顛倒の誤謬である。直接經驗に上では無より有を生するのである、その變化は互に離れるものに移り行くのではなくて、連續的推移である、所謂具體的一般者の自己實現である。我々は此場合に於ても無より有が生ずるといふの外はない、潜在的なものが顯現的となつたと云ても、其實何等の説明も與へられては居ない、直接には唯内面的必然の推移あるのみである。我々は斷片的なる感覺を統一して、「赤いもの」とか「青いもの」とか考へる、即ち一つの連續を考へる、而して之を客觀的實在と考へ、之に依つて我々の思惟の要

求を充たすのであるが、斯くして客觀的實在に到達し得たと思ふのは却つて自己の直下に返るのである、直接にして一層具體的なる思惟の創造に還つたのである。而して思惟が自然的實在を創造するとすれば、更に思惟其物を創造するものは意志である、意志は最も直接にして最も具體的なる絶對的創造である。フイテが我より非我を生ずるとも、若しこの「我」を相對的我と考へるならば、論理的必然と因果的必然とを混同したものとしか思はれないであらうが、フイテの所謂絶對我即ち絶對的意志は右に云つた如き我々に最も直接なる創造作用でなければならぬ、*causa efficiens* でなければならぬ。意志のアプリオリは知識のアプリオリを包含するのみならず、之に比して一層深くして且つ廣い、それで理性に對して非合理的と考へられるかも知らぬが、普通に合理的と考へられるものの中に於ても、論理に對して數理は非論理的であり、數理に對して幾何は人爲的である、而も具體的立場に於ては此等のアプリオリの奥に一種の内面的必然を認めねばならぬ様に、意志はすべての内面的必然である。

昔、エリギナなどが神は一切であると共に一切でないとか神は總べての範疇を超越するとか云つた所から、應無所住而生此心と云ふた様に忽然として生じ現れ來る直接の經驗とは如何なるものであらうか。無論その全豹は思慮分別を絶したものの

であらうが、余は之を絶対自由の意志と見るのが稍その眞に近いと思ふ、最も具體なる直接の經驗は絶対的自由意志の形に於てあると思ふ。無限なる外進 *extensus* であると共に無限なる内進 *intensus* である、一方から見れば、常爲即事實といふ様に、無限の進行であると共に、一方に於いては自由にその元に返り得る「永久の今」である。一方に於ては量であると共に、一方に於ては質的である、嘗て云ふた様に前者は數の基礎となり、後者は幾何の基礎となると云ふとができる。一方から見れば反省それ自身が行進である、思惟其物が事實である、然るに之と同時に、進行は目的に向つて進む行くのである、一方に機械論的なると共に一方に目的論的である、神は始であると共に終である。右の如き絶対的自由意志は理論的には矛盾とも考へられるであらう、併しエリギナが神は動的靜靜的動といつた様に、理論的に矛盾せる兩方面を統一したものが實に我々の自由意志の體驗である。如何にして此の如き矛盾せる兩方面が統一するとができるかは、論理的には説明はできぬ。併し論理的思惟は却つてかゝる自由意志を假定して成立すると云ふとができるのである。思想の三法則といふ如きものを考へるにも、此の如き體驗を許さねばならぬのである。所謂經驗論者はこともなげに自由意志は錯覺などといふが、此等の人々の考ふる實在とは思惟

の對象に過ぎない、而して此考を徹底すればロツツェの考へた様に相互作用の統一といふ如きものとなり、更に此の如き考の徹底すれば却つて絶對の自由意志といふ如きものに至らねばならぬと思ふ。余は之まですべての實在を自覺的體系として考へて來たが、自覺的體系の背後は絶對的自由意志でなければならぬ、實在の具體的全體を得るには知識的自我の後に實踐的自我の背景を加へねばならぬと思ふのである。知識的自我の對象たる所謂實在界よりも實踐的自我の對象たる希望の世界は廣い、前者は可能的世界の一部分に過ぎない。前者から見れば、後者は非合理的とも考へられるであらう、併し後者には後者の統一があるのである、我々の良心と云はれるものがそれである。「汝は斯くせねばならぬ」といふ定言的命令は論理的には不可解であるかも知らぬが、我々の論理的要求は良心の一部に過ぎない、知識的自我は實踐的自我の上に立つのである、我々の世界は當爲を以て始まるのである。Let there be light and there was light. と云つた様に、世界は神の意志を以て始まるのである。オリギネスが新プラトニ學派に反して、世界創造の根元に道德的自由を認め、物質界をも神の最後の流出とせずして、所罰の世界としたのは、單に知的なる新プラトニ學派に比して、一層深い所があると思ふ。神は無より世界を造つたといふは不合理の様

ではあるが、神は因果を超越して知識的には無でもなければ有でもない。若し知識以前に何等かの因果を認め得るならば、それは道德的因果でなければならぬ、アウグスティヌスが神は愛から世界を作つたといふ様に道德的因果は自然的因果より根本的である。實在をロツツェなどの云ふ如く作用、其物と考へたならば、その相互の内面的關係は意志と意志との關係でなければならぬ、即ち道德的ではなければならぬと云ふことができる。自然的因果律は之を外から見た表面的關係に過ぎない。

右に云つた如く意志が知識の根柢であつて、知識は意志に依つて成立するのであるから、知識に對して、最初の對象として與へられたるもの、即ち直接の所與は意志の形でなければならぬ、動的實在でなければならぬ。ベルグソンが直接經驗を純粹持續となし、リッゲルトなどが無限に異質的なるものを所與となし、歴史を以て自然科学より之に近きものとなすのは之に依るのである。無論、眞實在即ち神は動とも靜とも云はれないが、之を願たものが無限の進行である、歴史が最初の對象である。認識の對象と云へば普通には我に對立するものを考へるのであるが、我々の認識に客觀性を與ふるものは却つて認識作用の背後に横たはる具體的基礎でなければならぬ、即ち中世哲學に於ける *das Subjektum* でなければならぬ。我々が客觀的實在を知る

のは自己の根元に返り行くのである、自己の背後を省みるのである。此意味に於て我々の認識の最後の対象は絶対自由の意志でなければならぬ、無論絶対自由の意志は何處までも認識作用其物を超越して認識対象としては不可得ではあるが、対象としてその最初の相は絶対作用でなければならぬ。或は之に反して、判断作用の意識の前に、超越的意味即ち価値があるとも考へ得るであらう、併しリッケルトなどの様に考へるならば、超越的意味は如何にして内在的となることができるであらうか、プラトイのイデヤは如何にして現實に墮し來ることができらうか。我々の體驗を反省し、分析した上に於ては、作用と意味とを分ち、後者が前者を超越すると考へ得るでもあらう、併し我々はその以前に、具體的全體を體驗して居らねばならぬ、無論リッケルトなども此體驗を許して居るのである。自然科学的に考へられた心理作用といふ如きものに對しては、意味の世界といふ如きものが根本的と考へねばならぬであらう、フッサールの云ふ如く事實の世界も氏の所謂本質といふ如きものから成立つて居るのである。併し我々は意味の世界の前に尙體驗の世界を認めねばならぬ。プラトイのイデヤの前にプロチヌスの一者^ズを認めねばならぬ、而して此一者はプロチヌスの云つた如き流出 *Inanation* の根源といふ如きものではなくして、寧ろオリ

ギネスの云つた如き創造的意志でなければならぬ。

絶對的自由の意志が翻つて己自身を見た時、そこに無限なる世界の創造的發展がある、かくして認識對象として與へられる最も直接な最初の對象は歴史でなければならぬ、ペーメの云つた如く、對象なき意志が己自身を顧みた時、この世界が成立するのである。それでは反省といふことは何を意味するか、反省は如何にして可能なるか。絶對自由の意志とは、進むと共に退くことの可能性を含むことである *creans et non creans* と共に *nec creans* である。反省といふのは小なる立物より大なる立場に移り行くことであり、自己が自己の根元に返り行くことあり、行爲とは之に反して一つの立場から進み行くことである、自己が己自身を發展して行くことである。併し翻つて之を考へれば反省それ自身が又一つの行爲である、退くと考へられるのは進むのである、自己の元に返り行くのは自己を發展する所以である。斯く考へれば認識も一つの意志となる、すべてが意志の發展となる。單なる反省と考へられるのは、包容されたる小なる立場から包容する大なる立場を見た場合に過ぎない。絶對的統一即ち絶對的意志の立場から見れば、すべてが一つの意志となる。併し正當に云へば、絶對的統一即ち絶對的意志といふ如きものは、之を對象界に投射して考へること

のできぬものであるから、眞の統一は統一といふともできぬば、無統一といふこともできぬ。此故に眞の絶對的統一に於ては、すべてが知識たると共に意志である、アウクスチヌスは神は物があるから知るのではなく、神が知るから物があるのであると云つたのはかゝる體驗を言ひ現したものと考へることもできる。物理學者が超個人的意識の立場に立ち、物理的世界觀の構成に向つて進む時、それは知識の發展たると共に大なる自我の構成作用である。我々が或物を想像し、成物を實行する時、之を内面的に見れば、我の意識が或状態に達せんとするのである、自己の或状態を知らうとするのである。純反省の立場から見れば、心理學者の云ふ如く意志も一種觀念聯合に過ぎない、主知主義の心理學からは、すべてが知識であると考へることもできる。如何なる意識内容の發展が知識と見られ、意志と見られるかは、唯我々の立場の取方に依るのである、而して如何なる立場を取るかは、絶對意志の自由である。眞に直接なる實在は創造的意志である、創造的なる故に絶對自由である、ベルグソンの云ふ如く繰り返すことのできない創造は既に内から限定せられたものである、創造ではなく發展である。絶對自由の意志には内進の方面が含まれて居らねばならぬ、*hoc creata nec creans* の方面がなければならぬ。此の如く意志の立場の自由といふこと

が我々の所謂抽象作用として知らるゝ所のものである。抽象作用といふことは意志の無秩序の方面を示すものである。我々は或一つの具體的經驗を何の方面からにても自由に抽象し得ると考へるのは、抽象作用は自由意志の一部分なるが故である。

四十一

余は前章に於て我々に最も直接なる具體的體驗は絶対自由の意志であると云つた。意志と云へば直に單に決斷といふ如き無内容なる形式的意志が考へられるのであるが、余の絶対的自由の意志といふのは此の如き抽象的意志を意味して居るのでない。我々は考へることができると共に、見ることもできれば聞くこともできる、種々の思想が我の配下に屬すると共に、種々の經驗内容も我の配下に屬するといふことができる。視ること、聞くこと、考へること、動くこと、意志は此等の能力すべての總合である。此手を右に動かすか、左に動かすか、我に於て自由であると考へられるのは我は此手の力なるが故である。我は右にあるのでもなく、左にあるのでもなく、左右の運動を成立せしむるものなるが故である。普通の考方では、意志は二つの直線の結合點の如きものと考へられて居る、二つの直線が與へられて、その結合點が定つて

來る如く、二つの衝動が與へられ、その競争に依つて意志が定つて來ると考へられて居る。斯くして意志の自由と必然との議論が起つて來るのである。併し此の如き考方は既に意志を對象化したものである。一定の方向を有する二つの直線といふものが與へられた時、既にその結合點が與へられて居るのである。意志は結合點の如きものではなくして、寧ろ此等の關係を成立せしむる次元である。意志は種々の動機の競争を決するものではなく、寧ろ之を成立せしむるものである。此處に於ても、與へられたものは求められたものである。始と共に終が與へられるのである。意志は種々なる作用の成立の根元なるが故に、種々の作用を總合して自由であるのである。此の如き統一を人格の統一と名づけることができるならば、實在の根柢には人格的統一があると云ふことができる。我々に最も直接なる具體的體驗は人格的である。我々の手の動く所、足の踏む所、それに我々の全人格があるといふことができるのである。ヘーゲルが概念は直接なるもの假定 *Das Voraussetzen des Unmittelbaren* であると云ふ如くに、意志とか人格とかいふのは個々の意識の外にあつて、之を統轄するのではない、此等の意識を成立せしめる内面的創造力である。名匠の一筆一刀の中にもその全創造力が籠つて居る如くに、個々の意識はすべて我々の意志、我々の人格の創

造である。此故に我はすべての作用を統一して、我は自由であるといふことができるのである。昔猶太人の考へた如く、我々は神の肖像によつて造られたものである。

見るとか聞くとかいふ如き知覺作用も、決して普通に考へられる如き受働的作用ではない。フィドレルの云つた如く、我々が視覺に純一となる時、そこに無限の發展である、純粹視覺の世界は藝術的創作の世界である。フィドレルは他の感覺に於ては之を認めて居ない様であるが、程度の差こそあれ、余はすべての感覺に於ても同様であると思ふ。純なる知覺作用はすべて無限なる發展でなければならぬ、意識内容それ自身の發展でなければならぬ。我々の意志とか人格とかいふのは、此の如く一つのアプリオリからそれ自身に發展する種々なる作用の統一である。知覺といはず、思惟といはず、その直接の状態に於ては、それ自身に發展する無限の活動であつて、此等の統一が我々の意志であり、人格であるのである。余は是に於て、嘗て論理と數理との間に於て、又數理と幾何との間に於て論じた知識の形式と内容と關係の考方を經驗全體に及ぼして考へて見たいと思ふ。抽象的立場から見れば、即ち單に對象として考へて見れば、論理に對して數理は非論理的となり、數理の基たるアプリオリ

は論理に對して外から加はつて來ると考へられねばならぬ。併し具體的立場から見れば、即ち直接の全體として見れば、數理は論理の根元となり、後者は却つて前者に依つて成立すると考へるとができる。論理か己自身を完成し行く時、即ち主觀的から客觀的に移り行く時、自ら數理に移り行かねばならぬ、知識客觀性の要求から云へば、數理は論理の目的となるのである。知識の形式と内容との關係は、形式に對して内容が偶然的に外から與へられるのではなくして、形式が内容と要求するのである、而して、形式が内容を得るのは己身身の根元に返り行くのである、一言で云へば發生的關係である、萌芽と成長せる植物との如き關係である。向に思惟體系の發展を論じて論理より數理に至り、數理より幾何に及び、遂に解析幾何學の對象を以て思惟體系の最も具體的なる對象となしたが、純粹思惟の體系から所謂經驗の體系に移るには、そこに大なる罅隙があると考へられた。今此罅隙を融合するものは意志の統一、人格の統一であることが明となつた。單に認識對象として抽象的に考へられた純粹思惟の體系から、内容ある具體的經驗の體系に移り行くことの不可能と考へられるのは無理ないことである、思惟の形式に對して偶然的なる經驗内容が外から與へられると考へられるのは已むを得ざることである。併し意識の主體に返つて、即ち

直接なる具體的全體の立場に於ては、思惟とか、知覺とか、種々なる作用の根柢に於て、一つの意志の統一、人格の統一があることを認めざるを得ない。我々の思惟とか、知覺とかいふのは我々の意志、我々の人格の一部である、此等の作用は皆具體的自我の一部分として成立するのである。單にその一部分に過ぎざる純粹思惟のアブリオリからはこの全統一を理解することは不可能であらう、併し我々には論理以上なる自我の統一の體驗がある。若し此の如き具體的自我の統一の體驗がなかつたならば、知識の形式と内容との關係を如何なる意味に於て考へることも不可能である、内容は形式に對して偶然的であると云ふことすら考へ得ないのである。知識客觀性の要求とは主觀的なるものより客觀的なるものに、抽象的なるものより具體的なるものに、部分的なるものより直接の主體に進むことであり、即ち具體的全體が己自身を顯現する要求であり、自己が自己自身の根柢に返り行く要求であるとすれば、思惟の形式が經驗内容と結合するのは我々の意志統一の要求、人格統一の要求、即ち全自我の要求であると云はねばならぬ、之に依つて我々の知識は具體的根元に返つてその客觀性の要求を満足し得るのである。我々の思惟の體系が經驗内容と結合すること依つて、客觀的知識となると考へられるのは、之に依つて理解することがで

さる。コーエンの云ふ如く單に主觀的と考へられた虚數が、ガウスによつて平面に應用せられることに依つて、實在的意義を得たと考へられるのは之に依るのである。余は嘗て眞に直接にして具體的なる空間的直覺は心理學者の所謂延長の知覺といふ如きものでもなければ、又數學者の考へる如き連続といふ如きものでもない、*contingent*の全體ともいふべき先驗的感覺であると云つたが、今此の如き先驗的感覺とは經驗全體の統一から起る意志の意識であると云ふことができる。我々に直接にして具體的なる空間的意識はそれ自身に動的なる意志の形に於て與へられるのである。知覺の豫料の原理は之に依つて成立つ、此點を一步離るれば、一方は數學者の所謂單なる連續の考となり、一方は心理學者の所謂單なる感覺となるのである、此二者が實在的となるにはその根元に返らねばならぬ、*ツェノ*の如き運動不可能論に對して、ベルグソンは眞に運動を會得するには唯手を動かして見るまでであると云ふ如く、如何にして數學者の連續の考と心理學者の延長の感覺と結合するかは唯此手を動かすにあるのである、即ちフイテの創造的動作とも云ふべき直接の意志にあるのである。

我々の「我」といふのは種々なる作用の總合點である、「我」は考へると共に見ることも

できる否、此等の作用は實に「我」の統一に依つて成立するのである。併し此統一は認識の對象となることはできぬ、そこに認識の限界がある、リプスが表象の世界から意識の世界に至るには *Einschleppung* がなければならぬといふ様に、認識の世界から意識の對して、非合理的とか、偶然的とか考へられるであらう、併し論理から數理に移るにも、かゝる偶然性があつた、數理から幾何に移るにも、かゝる偶然性があつた。若しリッケルトなどの云ふ様に、嚴密に狭く純粹思惟といふことを考へるならば、すべてのものは非合理的であると云はねばならぬ。又或は此の如き統一は何等の内容なき空虚の概念に過ぎぬと考へる人もあるでもあらう、併し我々が概念的分析に依つてその内容を明にするとができぬからと云つて、無内容なる空名に過ぎぬと考へるのは誤である。我々の自己は何も限定せる個性を有つて居る、甲は乙と取り換へるとできない人格を有つて居る、此の如き個性が畫家や小説家の描寫の對象となるのである。藝術家の有する個性の意識が物理學者の有する電氣や熱の意識に比して、不明瞭であるとか、無内容であるとか云ふとはない。嘗に人格の意識が物理的知識に比して、限定せる或内容を有する點に於て、毫も遜色なきのみならず、その實在性を有

する點に於ても、所謂自然科學的知識に比して勝るも劣ることはないと思ふ。或一物體が甲點より乙點まで動いた時、我々はその背後に一つの力といふものを考へる、併し無論、力といふものは見ることもできねば、聞くこともできぬ。然らば感覺論者の云ふ如く、力とは空しき名に過ぎないかと云ふに、若し力が空虚なる概念ならば、元素的感觉といふ如きものも、空虚なる概念に過ぎない。實在はそれ自身にて動くものである。自然科學者の所謂力といふのは此の意味に於て實在的であるといふならば、人格の力といふものも、同一の意味に於て、實在的であると云はねばならぬ、却つてすべての實在に實在性を附與する根本的實在であると云ふことができる。

右に云つた如く、我々の意志とか人格とかいふのは單に抽象的なる形式的意志とか形式的人格とかいふものでなくして、諸能力の統一である。ポールにもペーターにも當嵌る抽象的意志や人格ではなくして、限定せられた具體的内容を有つたものでなければならぬ。此の如き意志は理性に對して偶然的と考へられるかも知らぬが、それ自身に動的であつて、一つの外面的必然である。余が向に云つた絶對自由の意志といふのは、此の如き意味に於て宇宙の創造作用であるのである。余は今此の如き絶對自由の意志と我々の個人的自由意志との關係を考へ、之に依つて、一層深く絶

對的創造意志の性質を明にし、かねて眞實在の相を明にするとができると思ふ。我々が我々の意識現象を直接に考へて見ると、我々の意識現象は一つの自己に依つて統一せられると共に、その一々が自由なる作用である。意識現象の根柢となる全體はその部分を否定する全體ではなくして、各部分の獨立、各部分の自由を許す全體である。我々の道德的社會がカントの云ふ如き目的の王國 *Reich der Zwecke* であるのみならず、我々の意識現象其物が目的の王國である。意識現象は道德的關係から成立つて居ると云つてよい、意識現象に於ては道德的當爲は單なる當然はなくして、作用である、故に *du kannst, denn du sollst* である。意識現象に於ては畫家の才が彼自身の作品に依つて發展する如く、我の全體が我の部分を創造すると考へられると共に、部分が全體を創造せられるのである。ベルゲンソンの云ふ様に、我の作爲するものは我に屬すると共に、我の作爲が即ち我であると云はねばならぬ。以上の如く考へて見ると、我々の意志の自由と絶對的意志の自由とは撞着するものではない、我々は絶對的自由の意志の中に於て自由である、否、絶對的意志は他の獨立を許すに依つて自ら眞に自由となることができるのである。白人は黒奴を解放することに依つて、彼自身を自由にしたと云ふことができる。兩者の撞着が考へられるのは、意志を

象化して考へる故である、意志と意志との間に對象的關係を考へる故である。何かの意志をいづれかの意味に於て對象化して見た時には何かの意志はその自由を失ふこととなる、神を無限の可能といふも既に之を對象化したものである。余は意志自由論者が單純に自己の内省に訴へて、直なるものは直で、曲なるものは曲であるといふ如く、意志は自由であるといふものも、強、幻覺として排すべきではないと思ふ。

之を幻覺と考へるのは我々の意識現象を對象化した結果である、併し意識の一々の根柢には到底對象化することのできない或物がある、如何なる個人的意志も對象界に對しては、その次元を異にして居るといふことができる、平面の世界に對する立體の世界の如きものである、我々の意志は此の如き意味に於て一々自由でなければならぬ、カントの云つた如く我々の道德的意識が之を證するのである。自然科学的因果律に依つて之を幻覺と考へる人は、自然科学的因果の世界が一種の當爲の上に立つことを考へて見なければならぬ。我は此現在に於て右せんも左せんも自由である、縦、肉體の上に於て不可能であるとするも我は我の人格の上に此事實を印すことができるのである。意志を動かすものは唯意志あるのみである、アウグスチヌスが神は愛から世界を造つたといふのは自然的因果の本に道德的因果を認めたものと

して深い意味があると思ふ。

右に云つた如く、我々に最も直接にして具體的なる意志に於ては、その全體の自由と部分の自由とは互に撞着せない、内面的に一つの意志なると共に、その一々が自由の作用である。無論斯く云ふも、我々の意志が自然の法則を破つて自由に働き得るといふのではない、自然界の出來事として對象化せられた意志は自然の法則の下にあるとは言ふまでもない、唯我々の意志はその根柢に於て一層深き體驗の世界に屬して居る、カントの云ふ如く *intelligible Welt* に屬して居る、此世界に於ては全體が一なると共にその一々が自由であるといふのである。眞に具體的なる體驗の世界に於ては、ヘーゲルの概念に於ての様に、その一々の部分が全體である、眞の具體的實在は個物 *Einzelnes* である、非合理性の中に合理性を具し、偶然性の中に必然性を具したものでなければならぬ。嘗ては分離的なるものは依他的であり、主觀的であつて、連續的なるものが獨立の實在であると云つたが、嚴密に云へば、單に連續的なるものも未だ眞に絶對的實在とは云はれない。單に連續的なるものは *Real + Ideal* として具體的であるかも知れぬが、未だ己自身の中に非連續的作用を統一して居ない、即ち偶然的實現の方面を含んで居ない、要するに未だ意志といふことはできないのである。例

へば藝術の作品と藝術家自身と異なる如く、藝術の作品は理想と現實との結合であるかも知らぬが、それ自身の中に創造作用を有つて居らぬ。眞の實在はそれ自身に創造的でなければならぬ、余はロツツェの相互作用といふ實在の考を尙不完全と考へるのは之に依るのである。眞の實在は自覺的でなければならぬ、即ちヘーゲルの概念の如きものでなければならぬ。具體的實在には偶然性 *Kontingenz* といふことを缺くことはできない、すべてが合理化せらるればすべてが非實在的とならねばならぬ。併しすべてを合理化することは不可能である、少くともすべてが合理的であるといふことを知るものは非合理的でなければならぬ。偶然的限定は合理的に説明はできぬかも知らぬが、合理性と偶然性の兩方面を統一したものが眞實在である、即ち我々の意志である。心理學者の所謂意識作用とは此の如き實在の偶然的限定の方面を指すものに過ぎない。余は嘗て極限點は反省のできない我々の自己の如きものであつて、此の如き極限點の集合が連續であり獨立の具體的實在であると云つたが、此の如き實在は尙知識對象の世界に屬して居る、従つて現實の意識を含むことはできぬ、現實の意識の此の如き實在に對して外面的なる。藝術家の全生命が一刀一筆の中にあるが如く、一々の限定其物の中に全實在がなければならぬ、即ち肉其物の中

に靈がなければならぬ。限定作用は如何にして起るかと問ふべきではなくして、限定其物が意志として直に具體的全實在であると云はねばならぬ。有限の背後に無限を考へ、現實の背後に本體を考へるのは、對象化せられたる智識界のことである。

眞に直接なる意志の體驗に於ては、有限が直に即無限である、現實が直に即本體である、行かんと要せば行き、坐せんと要せば坐す、此間に概念的分析を容るべき餘地がない。往々直接經驗の内容は無限に豊富なるもので、我々の知識はその一象面であるといふ様に考へる人もあるが、斯く考へられた直接經驗の内容とは所謂概念的知識と同じく對象の世界に屬したものである、如何にその内容が無限であつてもそれは相對的無限である。眞に直接なる體驗は概念的知識とその次元を異にしたものでなければならぬ、所謂概念的知識と對比して、その内容の多寡を論ずべきものではない。我々の現實の意識の背後に本體がある様と考へる時、その本體は現實と共に同一次元の上にあるのである、意識の眞の背後は一々無限なる神秘の世界に連なつて居らねばならぬ、即ちスコトッス・エリギナの云ふ如き神に接して居らねばならぬ。尙一直線上の點が一次元の中にあると共に、多次元に連なると一般である、我々の一々の意識は多次元の切點と考へることができるのである。(未完)